

モノづくりは 「希望づくり」。

仮設住宅団地発「手づくり教室」で、 コミュニティ再生！

東京電力福島第一原子力発電所の事故発生後、浜通りの大熊町や楢葉町住民の一部は、遠く県西部の会津地方へ避難。「これからの暮らし」が描きにくい状況のなか、「被災者の自立」に取り組みむ地元NPOの活動が注目を集めています。



現在も、原発から半径20キロ圏内の警戒区域は立入禁止（写真は南相馬市）



「ようやく気持ちも 落ち着いてきた」

「援助」をいただければかりだと、どうしても心苦しくなることもあるんです」

高田仮設住宅団地（福島県会津美里町）に暮らして8カ月を迎える松本咲子さん。原発から半径20キロ圏内に位置する楢葉町の町民であった松本さんは、事故直後、

着の身着のまま町を離れ、体育館や旅館での避難所暮らしを続けながら西へ向かった末の昨年6月、ここへようやく落ち着くことになったのです。

「方言も気候も違う。福島県って大きいからね。私たち『浜通り』の人間にとって『家族旅行で行く観光地』ってイメージだった会津にいまこうして住むとはね」と松本さん。最近、ようやく気持ちも落

ち着いてきたといえます。

「楢葉には、きつとしばらく帰れない。それならじたばたしてもはじまらないから、気分を入れ替えた方がいいかな、って」と思い直し、最近打ち込んでいるのが「布ぞうりづくり」。

毎週月曜く水曜、午前と午後の部で昨年12月にはじまった「手づくり教室」。仮設住宅団地内のコミュニティスペースを利用して、布ぞうりや編み笠などの手仕事に、住民たち有志が集まっています。

課題は団地内の交流や、 雇用創出

「手づくり教室」を運営しているのは、会津若松市で活動するNPO法人寺子屋方丈舎。この10数年間、地元で不登校や引きこもりに悩む若年層の学習支援などを行っているNPO法人ですが、代表の江川和弥さんは東日本大震災以降、「元気玉プロジェクト」と

いう支援ネットワークも立ち上げ、併行して被災者の暮らしサポートを行っています。

「原発事故後、浜通りの住民の方々の多くは同じ浜通りのいわき市へ避難されました。しかし避難所の数が限られていたり、放射能被害の拡がり未知数ななかで、ここ会津地方にまで来られた方もいます。その多くが大熊町や楢葉町の方々です」

避難当初は生活必需品や食料品などの物資支援が中心だったサポートも、次第に住居などインフラの整備に、現在では「住民同士の交流」や、突然の失業を余儀なくされてしまった方々の「雇用」が大きな課題となっています。

「援助していただくばかりじゃなくて、何かモノづくりを通してお返しできれば気持ちも楽」と松本咲子さん





250世帯が暮らす高田仮設住宅団地 (福島県会津美里町)

**「手づくり教室」を通じて
住民同士のつながりを深める**

そこで、江川さんが高田仮設住宅団地をモデルに実施を考えたのが「手づくり教室」でした。
「外部の人間がどんなに「さあ、みなさん仲良くしましょう！ 集まりましょう！」と言っても、住民の方々はすぐには受け入れられるはずもない。共通の話題を生む出合いの場——そのひとつの答えが「手づくり教室」でした」と江川さん。現在取り組む「布ぞうり」「編み笠」には、ある共通点がある



県外から訪問した支援ボランティアと打ち合わせをする江川さん(写真中央)

るといいます。

「会津に代々伝わる手仕事」である点です。周囲を取り囲む山々は日本屈指の豪雪地帯。その雪解け水が盆地の田畑に注がれる会津は、稲作を中心とした農耕文化が伝わる土地でした。農家は稲藁を使った手仕事で生活用品を生み出し、ときには商品として生計を立ててきた、そんな風土がここにはあるんです」

そうした手仕事の技術を持つ地元住民が「先生」となって、浜通りから来た方々にその技術と文化を知ってもらおう。教室を通じて会津の人とはもちろん、団地住民同士のつながりも深めてもらいたい、と考えたのでした。

しかも「布ぞうり」の材料となっているタオルやシャツは、全国から集まりながらも余っていた支援物資。支援者の善意を倉庫に眠らせておくのではなく、有効活用することで応えていこう、というアイデアでした。

**仕事は「生き甲斐」
助成金を活用して雇用創出**

「雇用」についても策を練りました。NPO法人として不登校児などの学習支援を事業として行っていた江川さんは、自治体が年間予算を組む「助成金制度」を、仮設住宅住民の雇用創出にも活用できるのでは、と考えました。

折しも、東日本大震災から半年以上経過し、義援金や支援基金が被災地に届けられようとしていた2011年秋。「仮設住宅住民が手づくり教室に参加し、モノを製作したことの対価として賃金をお支払いしよう」を助成金申請の「理由」にして、福島県へ申請を行います。もともと不況だった地方にあつて、震災により失業した方々の雇用を既存の産業から新たに生み出すこと自体至難の業。今回のように万単位での被災者が発生している状況では尚更でした。「申請はスムーズに受理されまし

た。原発事故の補償問題など、その他の対応に忙殺されている自治体が、私たちのような地域活動団体と地域づくりの労力をバランズよく分担することは、すでに震災前から地域で叫ばれていたニーズでした。今後それは加速していくように思います」

現在、「手づくり教室」参加の「賞金」は、時給750円。月額3万円程度の収入につながる方もいらつしやいます。

そんな経緯でスタートした「手づくり教室」に通い、布ぞうりづくりを励む先の松本さん。

「最初、教わりたての頃は無駄な力が入ってたのかしら、すごく肩が凝ってね。でも次第に力の入れ



松本さんが製作した「布ぞうり」。

加減を体が覚えちゃうと、無理なくどんどんでき上がっちゃうてー」

家族のために、と思つて編み始めた布ぞうりも、すでに10数個の力作が段ボールに保存状態。「せっかく会津まで来たんだもの、何か手習いでもしなないともったいない。今は遠くにいる息子にもそう言われたのよ」と松本さん。

「もつと違う柄や素材で、自分なりに工夫して作つてみたいな、つて思うようになってきたの。これで支援してくださった方に恩返しができるかも——そうそう、仲間の戸田さんの作品なんて商品化してもいいんじゃないかしら！ つてほどの出来映えよ」

松本さんが「大先輩」と敬う戸田幸雄さんは87歳。「手づくり教室」への参加者のなかでは最高齢です。四倉町の企業を定年退職した戸田さんの実家は農家。「昔、じいさんやばあさんが作つた藁ぞうりを思い出してやってみたら、意外にうまくできちゃって」と語

る戸田さん製作のそれには、絶妙な履き心地と色づかいから、年長者の風格が表れています。奥様を昨年8月に仮設住宅で亡くし、今は息子さん夫婦と同居中。布ぞうりづくりが何よりの「生き甲斐」になっているといいます。

**「布ぞうり」の商品化を通じて
思いがつながる**

その一方で、江川さんが懸念していたのが「その先」でした。せっかく完成した「布ぞうり」。決して市販品に見劣りしていないようにも思える。販売先が見つければ、住民の方々にとっての新たな収入源になるのはもちろん、より大きな生き甲斐が生まれるかもしれない、と。

そんな折、大震災後から会津での江川さんの支援活動に共感して、ボランティアを行っていた東京在住の有志メンバーたちが、ある提案を行います。そのメンバーのひ



「布を半分に折って、ひと編みごとに絞る。それがコンですな」と戸田幸雄さん(写真左)

と、山田文さんの職業はデザイナーです。

「製作された布ぞうりを見せていただいたら、色合い、編み込み、履き心地、どれもびつくりするぐらい素敵だったんです。それで、もつと布地自体の組み合わせや、包装するパッケージなども工夫したら、もつと素敵な「商品」になるんじゃないかと思つて」

さまざまな世代の、さまざまな暮らしを営む仮設住宅の方々が編み上げた「布ぞうり」。一つひと



山田さんたちが提案した布ぞうりの「商品開発案」。



つ異なる顔を持ちながらも、それがひとつのブランドにまとまれば——故郷を離れながらも、なんとか次の暮らしに向けて奮闘する方々への最大のエールになるかもしれない、と思つたといいます。江川さんや「手づくり教室」のみなさんに、山田さんたちが提案したブランド名が『COCOCHI(ココチ)』。「使い心地はもちろん、被災者として支援者がゆるやかにつながりながら互いに支え合っていく——そんな「心地よさ」を象徴するものになつたらいいなって」と山田さん(＊)。

「大震災後、遠く浜通りから避難

された原発被災者の方々と会津の方々とは、東京の支援者の方々も関わりながら、つながりはじめました。手仕事で生み出されたものが、人々の思いを乗せ、行き来する。その積み重ねの先に、新しい出合いの場ができていくといいですね」と江川さんは支援活動の新しい掘がりに期待を寄せています。



1月下旬、東京の支援グループにより、『COCOCHI』の材料となる布が寄贈されました。



手作り教室の参加者は、20代から80代まで年齢層もまちまち。

『COCOCHI』の布ぞうりの材料になります。
ご家庭で余っている「布」をご寄付ください!



文中でご紹介した「布ぞうり」づくり。布として使える“余った支援物資”が残り少ない状況です。そこで、『のんびる』読者のみなさんからの「布」の提供をお願いします。ご寄付いただいた「布」は、のんびる編集部より高田仮設住宅団地はじめ、他の仮設住宅団地にもお送りします。「モノづくり」を通じた被災者の自立支援へ、どうぞご協力ください!

こんな「布」を募集しています。

- 素材は「綿」に限定しています。布ぞうりづくりに向いた素材です。
- 使用済みの衣類、タオル等で結構です。リサイクルを基本と考えています。
- 布地の大きさは問いません。次々つなげて編み込むことが可能です。
- 柄付きでも結構です。色とりどりの布ぞうりができ上がります。もちろん無地でも結構です。

お問い合わせ・お届け先
 〒169-8526 東京都新宿区大久保2-2-6 ラクアス東新宿4階
 パルシステム のんびる編集部「布ぞうり係」 担当:藤井宛
 E-mail: fujii_susumu@c-gp.com

(*) 「布ぞうり」の商品開発に関わる山田さんと仲間が49ページの「わが社ののんびるさん」に登場しています。